

水晶文旦(すいしょうぶんたん)

育成者：戸梶 清(高知県室戸市吉良町)

来 歴：「晩王柑」と「土佐文旦」の交雑実生とされているが、定かでない。

特 性

■栽培特性

樹勢はブタンの中では中位。幼木～若木時代は、直立性が強いが結実期には開張する。枝葉はあまり密生せず、葉は波打つことがある。葉身は大きい、翼葉はブタンの中ではあまり大きくない。新梢の毛茸はない。枝は太く、節間の長さは樹勢、結果量等により異なる。枝の分岐は少なく、角度が狭く、枝裂けしやすい。

■果実特性

花は総状花序を形成し、花弁は白色で4弁。花粉の量は多く、稔性がある。自家不和合性であるが、単為結果性があるため無核果生産も可能であるが、ほとんどの農家では、前年のヒュウガナツなどの花粉を貯蔵し、受粉を行っている。種子は、受粉により30粒前後となるが、「土佐文旦」よりも少ない。胚色は白色で単胚。果実の大きさは、着果の状態により異なるが400～700g程度になる。扁球形で、果形指数は120程度で果頂部、果梗部はほぼ平面である。果頂部に小さな凹環がみられる。果皮は黄白色で、果面は滑らかである。果肉は淡黄色で、肉質は軟らかく多汁。施設栽培では、果肉先熟となるので3～5分着色時に収穫し、カラーリングを行い出荷する。適熟期の品質は、糖度10～12%、酸含量は、0.8%程度となる。また、収穫から収穫後、酸もどりをすることがある。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

当初、タターリーフウイルス(CTLV)を保毒しており、カラタチ台木での栽培は生育が不良で、ブタン実生台木等での栽培がなされており、品質、着花性が問題となっていた。しかし、ウイルスフリーの母樹が育成され、現在では、ほとんどがカラタチ台木で栽培されており、樹勢も落ち着き、着花性も向上してきた。トリステザウイルス(CTV)には感受性である。露地栽培では、黒点病の発生が多い。また、冬期、果実に寒害と思われる褐色のこはん症状が発生することがある。

■地域適応性

耐寒性は弱く、露地栽培ができる地域は限られている。高知県での栽培は、施設が中心で主に10月出荷の加温栽培である。収穫時まで品質の低下を防ぐために、雨よけ状態のため台風の被害をうける危険がある。

高知県では、施設栽培が普及してきているが、約8haあまりと特産果樹の域を出ていない。他県においては、若干の栽培がされている程度である。

(谷岡英明)